国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWSLETTER

ニューズレター

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

http://www.tufs.ac.jp/icjs/

2019.10

No. 25

○ 夏季セミナ 2019「言語・文学・社会―国際日本研究の試み」……p.1
2019 Summer Seminar “Language, Literature, Society: Constructive Approach to International Japanese Studies”

○ 国際日本語教育部門主催「多様化する日本語教育」第 3 回研究会……p.2
International Japanese Education Division “Diversifying Japanese Language Education” 3rd Research Meeting

○ 国際日本語教育部門主催「多様化する日本語教育」第 4 回研究会……p.3
International Japanese Education Division “Diversifying Japanese Language Education” 4th Research Meeting

○ 対照日本語部門主催「外国語と日本語との対照言語学的研究」第 28 回研究……p.4
“Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop

○ 今後の活動予定 ……p.6

夏季セミナ 2019「言語・文学・社会―国際日本研究の試み」
2019 Summer Seminar “Language, Literature, Society: Constructive Approach to International Japanese Studies”

夏季セミナー講師及び海外招へい大学院生

今回で第 8 回目となる夏季セミナー 2019「言語・文学・社会―国際日本研究の試み」が 7 月 24 日～ 26 日の二日間、開催された。夏季セミナーでは、センター教員も交え、併せて 12 の講義を行った。2016 年度（平成 28 年）に設立した、本学とシンガポール・タイ・中国・台湾・韓国の 10 機関による「日本語・日本研究コンソーシアム」構成機関から第一線の講師（新規参加の国立ラプラタ大学（アルゼンチン）、リオデジャネイロ州立大学（ブラジル）2 校を含む）8 名を

招へいし、それぞれの教員による講義が行われた。また、博報財団からの招へい研究員である3人の研究者からも講義が行われた。

サマースクール研究発表会も同時開催し、上記コンソーシアム構成機関から招へいした院生11名、さらに本学大学院生18名（うち日本人学生5名、留学生13名）、千葉大学から1名の報告者を迎え、活発な討議を行った。このサマースクール研究発表会は、将来の日本語・日本研究を担う若手研究者のよき交流の場となった。7月25日の夕刻には院生懇親会も開催され、夏季セミナー・サマースクール参加者に加えて、本学から林学長、国際日本研究センター教員の参加を得て、盛況に終わった。

サマースクール報告の概要は、国際日本研究センターのジャーナル『日本語・日本学研究』10号（2020年3月発行予定）に掲載される。

「日本語・日本研究コンソーシアム」には、すでにポーランド・ロシア・ウクライナの3校（ヤギェロン大学、イルクーツク国立総合大学、キエフ国立大学）を受入れているが、さらに、今回の夏季セミナーにあわせて開催された国際編集顧問会議では、このコンソーシアムに、ラプラタ国立大学、リオデジャネイロ州立大学を受け入れた。

なお、今回新たに夏季セミナーに参加された講師陣の顔ぶれを紹介しておきたい。郭連友氏（北京外国語大学）、ピヤワン・アサワラシャン氏（タマサート大学、タイ）、サトミ・キタハラ氏（リオデジャネイロ州立大学、ブラジル）、小那覇セシリア氏（国立ラプラタ大学、アルゼンチン）。博報財団からの三人は、羅暁勤氏（銘傳大学、台湾）、アダル・ラジャ氏（ピッツバーグ大学）、アイドゥン・オズベッキ氏（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、トルコ）である。

来年度の夏季セミナーでは、コンソーシアムの年次計画にあわせて、アフリカからの招聘を予定している。（友常勉）

The 8th “Language, Literature, Society: Constructive Approach to International Japanese Studies” Summer Seminar was held on July 24th and 25th. There were a total of 12 lectures held, including one by the Center’s Director. The Center invited 8 leading teachers from the 10 institutions comprising the “Japanese/Japan Consortium” set up in the 2016 academic year between TUFS and institutions in Singapore, Thailand, China, Taiwan and South Korea, including from newly joined institutions: National University of La Plata (Argentina) and Rio de Janeiro State University (Brazil). (Tsutomu TOMOTSUNE)

国際日本語教育部門「多様化する日本語教育」第3回研究会
International Japanese Education Division “Diversifying Japanese Language Education” 3th Research Meeting

国際日本研究センター国際日本語教育部門主催研究会「多様化する日本語教育」第3回研究会が、2019年7月18日（木）15:00～16:30留学生日本語教育センター213教室にて開かれた。現在、日本語教育は、その地域、対象、目的、学習者、学習方法、教師など様々な面において多様化している。現場の視点からそれらの多様化の状況を共有し、今後の日本語教育についてともに考えようという趣旨のもとに、連続研究会を開催している。

浦 由実 氏
（アン・ランゲージ・スクール成増校専任講師）
「ICT時代における教師の授業設計を考える
―日本語教育の現場の実践から」

今回、その3回目の研究会では、動画配信やSNSにおける教師交流なども積極的に進めているアン・ランゲージ・スクール成増校専任講師の浦由実氏をお招きし、「ICT時代における教師の授業設計を考える―日本語教育の現場の実践から」をテーマに、高度に情報化が進む現代において日本語教師はどのような授業設計の工夫ができるか、その目的・意義・効果などについて話を伺うとともに、学習者の能動的な学びの実現に向けて何ができるかを、参加者皆で考える機会を持った。

「教育現場のICT化」と言っても、新しい機器やツールを取り入れる動機や目的、またその程度は教育現場によって様々である。そのような現状の中でも、「教室」という教育現場は、確実に「学習者の自習方法の変化」および「人が伸ばすべき能力の変化」という2つの大きな影響を受けていることを浦氏は指摘する。スマホ（スマートフォン）で各種のアプリ（アプリケーション）を使えば、語彙や漢字などを自習することは可能であるし、文法や各種表現、発音などを学ぶことのできるインターネットサイトもある。また、情報を集めて決まった答えを導き出すだけならば、コンピュータの方が得意である。

国際日本研究センター
国際日本語教育部門
「多様化する日本語教育」
第3回　研究会
2019年7月18日（木）15:00~16:30
東京外国語大学 留学生日本語教育センター棟213教室
（一般公開・申込不要）
趣旨：現在日本語教育は、地域、対象、目的、学習者、学習方法、教師などさまざまな面において多様化している。現場の視点からそれらの多様化の状況を共有し、今後の日本語教育についてともに考えるための研究会を連続して開催する。3回目の今回は、ICT時代における教師の授業設計の工夫とその目的・意義・効果などについて、動画配信やSNSにおける教師交流なども積極的に進めているアン・ランゲージ・スクールの浦由実氏にお話を伺い、学習者の能動的な学びの実現に向けて何ができるかを、参加者皆で考える機会としたい。
15:00～15:05　趣旨説明
15:05～16:05　「ICT時代における教師の授業設計を考える―日本語教育の現場の実践から」
浦 由実氏
（アン・ランゲージ・スクール成増校　専任講師：日本語教育）
16:05～16:30　ディスカッション
主催：東京外国語大学　国際日本研究センター　国際日本語教育部門
伊集院郁子　大津友美　佐野洋　鈴木智美　鈴木美加　宮城徹　望月圭子
共催：日本学術振興会学術研究助成金基盤研究（C）「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」（課題番号：17K02842、研究代表者：鈴木智美）
お問い合わせ：国際日本研究センター　042-330-5794　info-icjs@tufs.ac.jp

では、このような中で、教室における学びとはどうあるべきなのか。

浦氏自身は、目の前の学習者の特性とその学習目標をよく見た上で、このような時代だからこそ教室で取り組むべきことは何かを考え、授業を作り上げているとのことである。例えば、学習者が主役になる能動的な授業や、対話を軸にした授業を行うことなどが考えられる。

ICT 時代における授業設計の工夫とは、単純にデジタル化を推進するということでもなく、逆に ICT 化の流れとは逆に旧来の手法を守るということでもなく、ICT 時代だからこそ教室で行う価値のある学びの活動とは何かを考えることなのだと言えるだろう。

浦氏の講演では、研究会参加者も「匿名で質問ができる」というアプリを使って実際に質問やコメントを研究会と同時進行で行ってみるなど、今の時代ならではの新しいツールを試す体験も交えつつ、グループでの情報・意見交換なども行いながら進められていった。

講演最後の質疑応答では、学習につまずきのある学習者にとって ICT が役立つ可能性が考えられること、また「日本語教師」の役割は、最終的には学習者の日本語上達の目標が達せられることにあるではないだろうかという意見などが出された。

約 40 名の参加者はグループディスカッションへの参加を含めて熱心に講演に耳を傾け、それぞれが ICT 時代における教師の授業設計のあり方について、客観的かつ前向きに考えることのできる研究会となった。

なお、今回の研究会は、日本学術振興会学術研究助成金平成 29 年度～31 年度 基盤研究 (C)「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」（課題番号：17K02842, 研究代表者：鈴木智美）との共催で行われた。（鈴木智美）

The 3rd “Diversifying Japanese Language Education” research meeting, organized by TUFS ICJS International Japanese Education Division, was held on Thursday, July 18th 2019 (15.00-16.30) at the Japanese Language Center for International Students, room 213. The invited speaker was Minoru URATA from An Language School. The topic was “Considering teachers’ lesson design in the age of ICT: Practice in the Japanese Language Classroom”. For participants it was a chance to hear about the aims, significance and effects of Japanese language teachers’ planning of lessons in an age of rapidly developing ICT, and to share ideas about how to put into practice active learning for students. (Tomomi SUZUKI)

国際日本語教育部門「多様化する日本語教育」第 4 回研究会
International Japanese Education Division “Diversifying Japanese Language Education” 4th Research Meeting

国際日本研究センター国際日本語教育部門主催研究会「多様化する日本語教育」第 4 回研究会が、2019 年 9 月 12 日（木）15:00 ～ 16:30 留学生日本語教育センター 103 教室にて開かれた。現在、日本語教育は、その地域、対象、目的、学習者、学習方法、教師など様々な面において多様化している。現場の視点からそれらの多様化の状況を共有し、今後の日本語教育についてともに考えようという趣旨のもとに、連続研究会を開催している。

今回、4 回目の研究会では、本学国際日本学研究院の荒川洋平氏（専門：認知言語学、国際言語管理）から、地域日本語支援者（ボランティア）への研修の経験に基づいて話を伺った。

荒川 洋平 氏（東京外国語大学）
「地域日本語支援者への研修をめぐって
～ミニ日本語学校ではない日本語教室とは～」

荒川氏の講演の主張は、①地域の日本語教育支援には、プロの教育機関とは異なる取り組みが必要であること、②そのための包括的な枠組と可変的な教材を開発すべきであること、③集住・定住の特性を考えて長期滞在の外国人材の活用が必要であること、の 3 点に集約される。

講演ではまず、地域支援日本語教育の歴史を振り返り、1978 年（昭和 53 年）に川崎市で行われた「識字学級」から始まり、外国人登録者数が 100 万人を超えた 1990 年以降に「地域の事情」に合わせたボランティアグループが誕生し、その後も増加の一途をたどっていった背景が語られた。ボランティアに対する研修の問題としては、予算の不足、マンパワーの不足、コースデザイン・レベルの曖昧さが挙げられる。プレサービス（新規の支援者養成）もインサービス（すでに教えている支援者への再研修）も重要であるが、自治体では特に後者が不足しており、教授法の進展や SLA（第二言語習得）の最新の知見からは取り残されやすいという問題点も指摘された。

講演の後半では、荒川氏自身による埼玉県の自治体での研修例の紹介があった。研修では、実際の授業動画を視聴しながら、クラスマネジメントの方法やティーチャートークの程度、評価（ほめ）や誤用訂正のし方などを具体的に観察すると同時に学習者への指導で役立ちそうな日本語学の基礎も教え、また、スーパーのちらしを見ながら、どのような練習、話題、活動が可能かを考えるといったハンズオン実習も行っているとのことであった。

講演の中でも、実際の授業動画が流され、日本語学の基礎を学ぶプリントも配布され、スーパーのちらしで何ができるか考えるグループ活動も取り入れられたため、荒川氏による研修の実践内容が参加者にも具体的に伝わってきた。荒川氏の考えによれば、地域日本語支援の場はミニ日本語学校化するよりも、楽しく対話ができ、相談したいことがあれば相談もでき、安心していられる場として存在すべきである。そして、研修の場で利用できるような映像教材や可変的な教材群が整備されること、日本人に限らず学習経験のある外国人も仲間に加え、共に取り組む仲間をどんどん増やしていくことが必要であるとの考えも示された。

参加者同士のグループの話し合い活動も盛り込みながら進められた講演は、最後に参加者を巻き込んでの情報交換の場となった。三重県からの参加者をはじめ、各地域でのボランティア研修担当者や大学教員、学部生等、50 名の参加者があり、貴重なディスカッションが行われた。

日本語教育推進法の成立を受け、地域の日本語支援も今後大きく動き出すことが予想される。日本語の習得を必要とする人々に対し、置かれている状況や希望、能力に応じてどのような日本語教育を提供していくべきか、関係者が集って考えを共有していくことの意義が感じられる機会となった。（伊集院郁子）

The 4th “Diversifying Japanese Language Education” research meeting, organized by TUFS ICJS International Japanese Education Division, was held on Thursday, September 12th 2019 (15.00-16.30) at the Japanese Language Center for International Students, room 103. The invited speaker was Yohei ARAKAWA from TUFS Institute of Japan Studies. The topic was “Training for Regional Japanese Language Supporters: Japanese Classrooms that are not Mini Schools”

Professor Arakawa made the main following points. First, Japanese language support in regional areas requires different initiatives to professional educational institutions. Second, for this purpose it is necessary to develop overarching frameworks and adaptable teaching resources. Third, the skills of long-term foreign residents should be employed. In the second half of the lecture, Professor Arakawa gave details of the training he undertook for a local authority in Saitama Prefecture.

The lecture was interspersed with group discussions among participants, and concluded with a valuable chance for all 50 participants to share information. The event proved to be a meaningful opportunity to think about what kind of Japanese language education should be provided going forward, considering the circumstances, wishes and competences of those on the receiving end. (Ikuko IJUIN)

対照日本語部門「日本語と外国語の対照言語学的研究」第 28 回研究会
“Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop

2019 年 9 月 28 日、東京外国語大学語学研究所にて、『外国語と日本との対照言語学的研究』第 28 回研究会が行われた。

本学の西畑香里氏（通訳翻訳研究）と児倉徳和氏（満洲語口語研究）が研究発表をし、そして静岡大学の大薗正彦氏（ドイツ語学研究）が講演を行った。

最初に、西畑香里氏による「通訳者のキャリア開発プロセス実態調査研究―通訳概論への応用―」と題する発表があった。通訳者のキャリアプロセスについて、これまで日本では学術的な調査が行われておらず、個々の通訳者による経験が語られるだけでは通訳者を目指したい人々に対して適切なキャリア指導を十分行うことができない課題があった。そのような背景から発足した西畑氏が所属する「通訳者のキャリア開発プロセス実態調査研究プロジェクト」では、日本におけるプロ通訳者 199 人に対する質問紙法による調査により、データに基づく体系的な説明を可能にし、通訳者を目指す人々に対するキャリア指導に役立てることを目的として、研究を進めてきた。

西畑 香里 氏（東京外国語大学）
「通訳者のキャリア開発プロセス実態調査研究―通訳概論への応用―」

本発表では、まず実態調査結果を量的調査と質的調査の 2 段階に分けてそれぞれの分析結果が提示された。

量的調査では、通訳者を目指した年齢やきっかけ、分野、自立に要した期間などの数値データを基に通訳者のキャリアプロセスの実態が明らかになっただけではなく、通訳者のキャリアの築き方が人それぞれであるなかで、データに基づく類型化の考察も行われた。質的調査では、質問紙の自由記述欄の回答を M-GTA を援用して分析することにより 23 概念が抽出され、そこから通訳者の「やりがい」「問題」「不安」「期待」の 4 カテゴリ―が生成され、通訳者の心情が体系的に示された。

さらに、このような研究調査の結果をどのように授業に応用できるかについて、西畑氏が担当する通訳概論の授業を例に紹介があった。通訳の世界について多角的な視点から学び、通訳者の仕事についての理解を深めることを目的にしており、キャリア指導のまさに対象となる学生が受講しているクラスである。本研究の成果を授業に応用し、今後の教材作成に活かす展望についても言及がなされた。

初めて行われた実態調査であることからも活発な質疑応答が行われ、通訳の仕事に対する社会的認知が低い問題や、時代や地域により特徴が異なる点があることもわかった。（降幡正志）

次に、本学アジア・アフリカ言語文化研究所の児倉徳和氏による「シベ語と日本語のモダリティの対照―「のだ」と「ている」を中心に」と題する発表があった。

シベ語は、中国新疆ウイグル自治区のチャプチャルシベ自治県やイーニン市を中心に話される口語満洲語の一変種で、ツングース諸語に属する言語である。

児倉 徳和 氏（東京外国語大学）
「シベ語と日本語のモダリティの対照
―「のだ」と「ている」を中心に―」

児倉氏はこの言語研究の第一人者であるが、発表では、著書『シベ語のモダリティの研究』においても示されたシベ語のモダリティの特徴の一部について、特に日本語の「のだ」と「ている」との相違点の観点から、解説が行われた。

具体的には、シベ語の「（て）いる」bi- の特徴と分析の解説を通じて、シベ語の bi- が日本語の「ている」よりもモダリティ的性質が強いことなどが紹介された。また、シベ語の「の（だ）」=ŋe の背景事情の説明の機能などが解説された。豊富な具体例の分析を通じて、シベ語と日本語の「（て）いる」「の（だ）」が、相互に形式的には対応するものがあるものの、機能には少しずつずれが存在していることが述べられた。

今回の発表を通して、児倉氏のシベ語研究の知見の一端を日本語との対照という観点から知ることができた。発表後の質疑応答でも活発な議論がなされ、充実した研究発表となった。（三宅登之）

最後にゲストである大薗正彦氏（静岡大学）が講演を行い、引き続き、翻訳、日本語と外国語の対照研究、外国語授業への貢献などについて質疑応答が行われた。以下、大薗氏からいただいた概要を掲載する。

言語研究におけるデータの重要性は言うまでもないが、それは対照研究でも同じである。そして、作例か実例かという悩みも同様に常について回る。対照研究に実証性を持たせ、実例を採用しようとする場合、最も一般的に利用されるのは翻訳作品であろう。しかしながら、一口に翻訳と言っても多種多様な方法が存在する。「恣意的に都合の良い例ばかりを取り上げているのでは」という批判を受けないためにも、一度翻訳の種類や方法について押さえておくのは有意義なことであろう。本講演では、前半で翻訳の具体的な方法を概観したのちに、後半では、近年認知言語学の分野で論じられることの多い「事態把握」（construal）の問題について、主に日独の翻訳作品を用いながら論じた。

大薗 正彦 氏（静岡大学）
「翻訳から見えてくる日本語らしさ
―日独語の出来事の捉え方をめぐって―」

職業翻訳者に対しては、各種団体で倫理規定が定められていることが多く、「正確性」はもちろん重要なポイントとなる。しかしながら、事はそう単純ではなく、実際には、何に重きを置くかによって翻訳の評価は異なってくる。ただし、ここ半世紀ほどの翻訳理論は、大まかに、等価志向から機能志向への流れ――つまり、ST（起点テクスト）志向から TT（目標テクスト）志向への流れ――であったと言える。とりわけ商業ベースに乗ることになる翻訳では、読みやすさ・分かりやすさに重きが置かれるため、目標言語の特徴が反映されやすい。子供向けの絵本では、この傾向（TT 志向）がさらに顕著になるものと思われる。対照研究では文学作品の翻訳が用いられることが多いように見受けられるが、とりわけ言語間の相違に着目するような研究では、実際、翻訳作品が興味あるデータを提供してくれるという側面がある。もっとも、「逐語訳」から「パラフレーズ」、「翻案（アダプテーション）」へとつながる翻訳の種類、さらにはテクストの種類に注意を払っておく必要がある。

講演の後半では、実際に翻訳を用いた対照研究の具体例を紹介した。とりわけヨーロッパ言語との対照において、日本語の特徴として指摘されるのが、「主客合一」的な視点の取り方である。日本語の話し手（主体）は、言語化の対象となっている事態（客体）にいわば埋め込まれた格好で、「見え」のままに事態を把握し言語化する傾向が強い。一方、ヨーロッパ言語の話し手（主体）は事態（客体）に対し距離を取った形で、「主客対立」的に事態把握を行うのが特徴的である。この点が反映される言語現象として、まず空間表現と知覚表現、続いて「自己」と「他者」に関わる言語現象を取り上げた。一見原文からかけ離れているような翻訳の例を見ながら、いずれも各言語の基本的な事態把握を踏まえた訳となっていることを確認した。（成田節）

"Research Surveys on the Current State of Career Development for Interpreters: Applications to Interpreting Overviews" (Nishihata Kaori)

Nishihata Kaori introduced research conducted in the "Research Surveys on the Current State of Career Development for Interpreters Project", of which she is a member.

She first presented analyses of quantitative and qualitative surveys. The results of the quantitative survey revealed the current state of the career process for interpreters through numerical data concerning the age at which and reasons why participants decided to become interpreters, their fields, and the length of time it took for them to become independently established. In addition, while each individual interpreter pursues their career in a different way, typological observations were also provided based on the data collected. In the qualitative survey, M-GTA analysis of free descriptive answers in the survey led to extraction of 23 concepts. These concepts generated four categories, "job satisfaction", "problems", "anxiety" and "hopes", together showing the system of interpreters' sentiments. (Furihata Masashi)

"A Contrast of Modality in Xibe and Japanese Focused on the "-noda" and "-teiru" Forms" (Kogura Norikazu)

Xibe is a spoken variant of Manchu, and belongs to the Tungusic language group. It is principally spoken in Yining City and the Qapqal Xibe Autonomous County of the Xinjiang Uighur Autonomous Region. Kogura Norikazu is the leading researcher of Xibe. In the presentation, he introduced some of the characteristics of modality in Xibe, as featured in his publication "Research on Modality in Xibe", focusing on the differences between Xibe forms and the Japanese forms "-noda" and "-teiru". (Miyake Takayuki)

"The Characteristics of Japanese Seen Through Translation: Perceiving Events in Japanese and German" (Ozono Masahiko)

Translations are probably the type of real language example most frequently used to substantiate contrastive research. However, there are numerous methods of translation. In the first half of his presentation, Ozono Masahiko gave an overview of specific methods of translation, and in the second half he used Japanese-to-German translations to consider the issue of event construal, much debated in recent years in the field of cognitive linguistics.

Professional translators are constrained by the ethical codes of various organizations, and accuracy is of course important. However, the value of a translation in fact changes depending on where emphasis is placed. Contrastive research seems to make frequent use of literary translations. Care must be taken regarding translation types, ranging from "literal translations" to "paraphrases" to "adaptations", and to text types.

In the second half of the presentation, examples of contrastive research using translations were introduced. (Narita Takashi)

今後の活動予定

対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』
第 29 回研究会

日時：2019 年 12 月 14 日（土）14 時から
場所：語学研究所にて（研究講義棟 419 室）

☆プログラム☆

・「陳述と진술について―日朝対照文法論の観点から―」五十嵐孔一（本学）
・「名詞複数形に関する日仏対照研究」Puyo Baptiste（本学）
・「人間名詞を含む NN 複合語の生成：日仏語対照研究」藤村逸子氏（名古屋大学名誉教授）

(なお、第 30 回の研究会は、2020 年 2 月 29 日（土）14 時から、予定しています。)

比較日本文化部門主催研究報告＋講演会

日時：2019 年 12 月 19 日（木）17 時 30 分から
場所など詳細は、追ってホームページにて公開します。

・慶熙大学校国際学術大会「沖縄学」は可能なのか――ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望」報告　友常勉（本学）
・講演：金東炫（キムドンヒョン）氏（済州大学校）
・コメント：上原こずえ（本学）

次世代研究ワークショップ
「次世代に向けた日本研究の可能性
――南アフリカから」

2019 年 3 月 7 日（予定）

お知らせ

今後、国際日本研究センターが主催する企画のご案内用のメーリンスリストに登録を希望する方は、以下のメールアドレスまで、件名に「メールアドレス登録希望」とご記入し、お名前と登録希望のメールアドレスを送ってください。
info-icjs@tufs.ac.jp

発行 東京外国語大学国際日本研究センター 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラグローバル 2F
TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/icjs/